

# ポポフ ニュース

2011年6月号



## 東日本大震災で被災された方々へ

ジョン・カヘークワ

まず、このたび東日本大震災でお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表したいと思います。また、負傷された方々、家財を失って避難されている方々、福島原発の事故で避難されている方々、事故に伴う混乱で多くのトラブルに巻き込まれた方々に心から応援のエールを送りたいと思います。被災された方々の中には、これまでポポフを支援していただいた方々が含まれていると案じています。どうか無事で、元気にご活躍されていることを祈っております。

実は、ポポフの本部があるコンゴ

### ポポフとは

ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Pole Pole Foundation)の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカ

民主共和国の東部は、火山性の地震が多発する場所です。これまでも大きな地震があって、たくさんの建物が倒壊し、多くの人々がその下敷きになって命を落としました。北へ約150キロメートル離れた都市は州都でたくさんの人々が暮らしていますが、何度も近くにある火山が噴火して、ひどいときには溶岩で都市が埋まってしまったこともあります。だから日本で起きた今度の大地震はとても他人事とは思えません。私たちはコンゴと日本で同じ苦難を分かち合い、復興と再生へ向けて協力していきたいと願っています。コンゴから日本はとても遠く、日本へ出かけて支援活動をすることはできませんが、私たちがいつも皆さんのために祈っていることを忘れないでください。

体は離れていても、空と大地はつながっています。

どうか私たちの祈りの声が届きますように。

そして、一日も早くもとの穏やかな暮らしが戻りますように。私たちはいつもあなた方とともにいます。



フジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりし

ています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフグッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いに興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。

# 活動報告 (2010年6月から2011年6月まで)

## 2010年

- 6月19日 ●STOP! 絶滅キャンペーン トークショー「知りたい! 守りたい! トラの世界、ゴリラの世界」(山極寿一・戸川久美)、トラ・ゾウ保護基金・ポレポレ基金共催、一心寺南会所(大阪市)
- 7月22日 ●シンポジウム「いのちと環境から考える」(中村桂子・山極寿一・佐野春仁・西村仁志)、京都水族館(仮称)と梅小路公園の未来を考える会主催、ハートピア京都(京都市)
- 7月30日 ●講演「ゴリラの暮らしから少子高齢化社会を考える」(山極寿一)、妙心寺社会事業従事者研修大会講演、妙心寺花園会館(京都市)
- 8月9日 ●講演「人間家族の起源—ゴリラの社会から考える—」(山極寿一)、第45回文芸教育全国研究大会基調講演、ALSOKホール(広島市)
- 9月14日~20日 ●世界の霊長類の絵本展 堺町画廊(京都市)
- 9月16日 ●第23回国際霊長類学会口頭発表「Successful model of regional collaboration for mountain gorilla conservation in Bwindi-Virunga landscape」(Augustin Kanyunyi Basabose)、京都大学時計台百周年記念館(京都市)  
●第23回国際霊長類学会ポスター発表「Impact of human subsistence on gorilla conservation in the Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo」(Dominique Bikaba)、京都大学時計台百周年記念館(京都市)
- 9月17日 ●第23回国際霊長類学会口頭発表「Monitoring of gorillas and environmental education in Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo」(John Kahekwa)、京都大学時計台百周年記念館(京都市)  
●第23回国際霊長類学会口頭発表「Quest for coexistence with nonhuman primates」(Juichi Yamagiwa)、京都大学時計台百周年記念館(京都市)
- 9月20日 ●「アフリカ人の研究者によるアフリカの昔話の語り」(John Kahekwa, Augustin Kanyunyi Basabose, Chimene Nze, Etienne Akomo, Philippe Nbehang) 堺町画廊(京都市)
- 9月25日 ●講演「アフリカの山とゴリラの魅力」(山極寿一)、日本山岳会静岡支部設立60周年記念講演、NPO法人静岡県男女共同参画センター「あざれあ」(静岡市)
- 9月26日 ●講演「ゴリラに学ぶ子育ての知恵」(山極寿一)、第23回くまもと子育てトーク、山鹿市鹿本生涯学習・健康センター(山鹿市)
- 10月1日 ●講演「ゴリラ語で絵本を読んでみよう」(山極寿一)、中央区民カレッジ、月島社会教育会館(東京)
- 10月8日 ●講演「ゴリラの子育てと家族の起源」(山極寿一)、日本助産師会中国・四国地区研修会、米子ワシントンプラザホテル(米子市)
- 10月9日 ●講演「世界遺産の森から学ぶこと」(山極寿一)、アメニティ2000協会創立10周年記念講演会「自然と共生社会—生き物から人間の未来を考える—」、関西学院中学部講堂(西宮市)
- 10月11日 ●対話「チンパンジーとゴリラの対話」(松沢哲郎・山極寿一)、法然院(京都市)
- 11月13日、14日 ●SAGA13シンポジウム「ポポフの活動紹介」 麻布大学(相模原市) よこはま動物園ズーラシア(横浜市)
- 12月19日 ●講演「ゴリラから見た人間の家族—Part 2」(山極寿一)、第23回子育て講演会、京都チャイルド・トラスト、キャンパスプラザ京都(京都市)
- 12月14日~23日 ●あべ弘士原画+作品展「ごりらのごるちゃん」 堺町画廊(京都市)
- 12月20日 ●「ゴリラ談義」(あべ弘士・山極寿一) 堺町画廊(京都市)

## 2011年

- 1月30日 ●シンポジウム発表「ゴリラ観光の光と影—生物多様性保全と地域振興を目指して」(山極寿一)、UNCRDシンポジウム「生物多様性と地域開発」、国際連合地域開発センター(名古屋市)
- 4月17日 ●座談会「語ろう、動物園の夢」、第126回法然院森の教室「動物園や水族館って何だろう?」(あべ弘士、早川篤、山極寿一)、法然院(京都)
- 5月20日 ●学会発表「生物多様性保全とエコツーリズム—ゴリラ観光の光と影」(山極寿一)、日本アフリカ学会第48回学術大会特別講演会「大森林のエコシステム—最先端の研究者の複合的まなざし」、弘前大学(弘前市)
- 6月12日 ●講演「人間の祖先はどうして熱帯雨林を出たのか—ゴリラとチンパンジーの社会生態から考える」(山極寿一)、モンキーカレッジ、日本モンキーセンター(犬山市)



## 国際霊長類学会京都大会と霊長類の絵本展

山極寿一

昨年の9月12日～17日に、京都大学で第23回国際霊長類学会学術大会が開かれました。2年に1度開催される霊長類学で最も大きな大会です。今回は55カ国1000人を超える研究者や学生が集い、1週間かけて霊長類の研究、保護、福祉などについて熱く語りました。今大会の共通テーマは「霊長類と人との共存」です。でも霊長類が生息するのは主として熱帯地域で、その多くは発展途上国にあります。そのため、なかなか参加する費用が捻出できず、これまで生息国からはあまりたくさんの参加者はのぞめませんでした。今回は大学を会場にして参加費を安くし、寄付や助成を募って生息国からの参加者を支援することができ、実際にサルや類人猿たちと共存している国の研究者が多く参加することができました。

ポポフのメンバーも、ジョン・カヘークワ、バサボセ・カニューニ、ドミニク・ビカバの3人が来日しました。このうち、ポポフ日本支部はジョンさんの来日費用を助成し、大会でポポフの活動について世界の研究者に紹介することができました。ジョンさんはカフジが世界で初めてゴリラ・ツアーを始めた場所であること、1頭1頭のゴリラに名前をつけてその行動記録を積み上げてきたこと、今そのゴリラの名前を使って子どもたちに環境教育をしていることを語りました。ゴリラに名前をつけて観察する方法は日本の霊長類学者が始め、1980年代のはじめに私といっしょにゴリラを観察するうちにジョンさんが採用するようになったのです。今や観光客にゴリラを説明するにも、子どもたちにゴリラの歴史を教える上でも大いに役立っています。

バサボセさんは、カフジのヒガシローランドゴリラだけでなく、ヴィルンガ火山群やブウィンディ森林のマウンテンゴリラ



◀ 霊長類絵本展での昔話

も視野に入れた研究と保護の活動をしています。コンゴ民主共和国の中央科学研究所の研究者でありながら、IGCP(国際ゴリラ保護計画)というNGOのオフィサーとしても活躍しており、今や中央アフリカ東部のゴリラ全体の保護に携わっています。その最近の成果から、どのように地元の要請にこたえたゴリラの保護計画を推進していくかについて、マウンテンゴリラの事例に基づいて発表しました。年々観光客が増えているマウンテンゴリラの地元では観光収入が地元の発展に利用されています。ゴリラを地元の人々の財産として、地元の人々を含めたモニタリング計画を遂行する必要性を述べました。

ドミニクさんは、これまでバサボセさんや私と続けてきたポポフの地元の社会経済調査の結果について発表しました。隣国ルワンダの戦争や引き続いて起こった動乱によって地元の経済は冷え切っていて、コミュニティも力を失っています。2つの地域でそれぞれ5つの家族に頼み、毎日食料や物資の消費と動きを測定してもらった結果、多くの家族で戦災孤児を抱えており、毎日の食事からは必要な栄養を得られていないことがわかりました。とくに動物たんぱく質の摂取量が少なく、5分の4の家族で必要最小量を満たしていませんでした。動物たんぱく質の多くは干し魚から得ており、肉の摂取量が足りません。ポポフはこれまで地元でヤギやブタ、モルモットを配給し、栄養改善に努めてきましたが、まだまだ不足しているという実態

が浮き彫りになりました。また、料理や暖をとるための燃料もほとんどが薪や炭から得ており、石油を用いていたのは1家族だけでした。これではゴリラの生息地が荒らされるのは目に見えています。ポポフは苗木センターで成長の早い木を育て、それを近隣の村々に配って植林を奨励しています。この活動をさらに推進していく必要性を強く感じました。ドミニクさんの発表はポスターで、多くの人々が見に来て熱心に質問していたのが印象的でした。

大会期間中、京都の堺町画廊では世界の霊長類の絵本展を催し、マダガスカル、アフリカ、アジア、南米など世界各地で作られている霊長類を題材にした絵本が展示されました。前国際霊長類学会





会長のアイソン・ジョリーさんをはじめ、何人かの研究者から絵本を寄付していただきました。中には古い時代に作られた貴重な本もあって、国によって、時代によって人々がどのように霊長類を見なしてきたかがよくわかる展示でした。

9月20日には、ジョンさんとバサボセさん、それにガボンから来日したフィリップ・ベアングさん、エチエンヌ・アコモさん、シメヌ・ンゼさんが加わり、アフリカの昔話を披露してもらいました。それぞれスワヒリ語とフランス語で語り、それを伏原納知子さん、安藤智恵子さん、私が同時通訳をしました。途中で地元の言葉で歌が入り、虫や骸骨がしゃべったり、チンパンジーが人間の赤ん坊をさらっていってしまうなど、奇想天外な内容でした。面白く、かつ自然とともに生きる人間の暮らしを改めて考えさせられる話だったと思います。暑さにもかかわらず、会場となった堺町画廊は満員で、みな熱心に耳を傾けていました。このとき効いたお話の一つは、このポポフニュースの最後に内容が紹介されていますので、ぜひ読んでください。



▲ POPOFistes のメンバーたち

働いていた夫を、戦争や混乱の中で失った妻たちが15人含まれています。これらのレンジャーたちはゴリラを保護するために危険な業務についていて、若くして命を落としたのです。妻たちはまだ小さい子どもをたくさん抱えています。ポポフはこれらの15人の妻たちにブタを2頭づつ配り、家畜飼養や子どもたちの教育の仕事に就いてもらっています。ポポフ日本支部の助成金は、Tシャツの他に、女性たちがまとう伝統的な衣装のカンガ50着の購入に充てられました。

行進はポポフ本部のあるミティから始まりました。二人の女性が「環境のために共に歩む女性たち、さあ環境を保全するために団結しよう」と書いたベッドシーツを掲げて先頭を歩きました。彼らは歌い、踊りながら、ムレサカトリック教会のそばを通り、空港のあるカヴムまで行進しました。そして腰をおろし、めいめいが用意してきた食べ物を分け合いながら、環境のためにこれから何ができるかを話し合いました。いっしょに行進した他の団体の女性たちとも交流しました。聞いたところによると、ポポフの活動はこの地域で女性たちのモデルとなっているそうです。とくに、ポポフが育てた苗木を子どもたちが配り、それを各村で女性たちが植えて育てる活動はいい模範になっています。警察の力によって上から命令するのではなく、自分たちが自らの意思で行うコミュニティ・コンサベーションの始まりになると考えています。

このように世界女性の日の行進はとても成功でした。ポポフの活動は女性たちの手によってしっかり地元根付いています。皆さまのご支援に心から感謝いたします。

## 世界女性の日

ジョン・カヘークワ

このたびは、世界女性の日のポポフ女性会員の行進を支援していただき、ありがとうございました。毎年3月8日の世界女性の日は、コンゴ民主共和国の女性たちにとって、プラカードを掲げて行進するのが習慣となっています。昨年はオランダのアペルドールン動物園から助成を受けました。今年はポポフ日本支部からの支援を受けられてとてもうれしく思っています。

今年行進では、ポポフのロゴが入ったTシャツを100枚作りました。そして、ポポフのために働いている女性たちは伝統的な衣装の上にこのTシャツを着て行進に臨みました。女性たちの中には苗木センターで働いている人や、国立公園の作業服を作っている人たち、アートセンターでポポフグッズを作っている人たち、環境教育学級で子どもたちを教育している人たちがいます。また、カフジ・ビエガ国立公園でレンジャーとして



◀ POPO Fistes



## ポポフの新しい取り組み

マエシェ・キサンガーニ

みなさん、はじめまして。ポポフ本部の新しい事務局長となったマエシェ・キサンガーニです。このたび新しいNGOのStrong Rootsを立ち上げるためにポポフを離れたドミニク・ビカバさんに代わって、事務局の運営を推進することになりました。会長のジョン・カヘクワさん、総務のジルベ・イググさん、アートセンターのダビッド・ビシムワさんと今後のポポフの活動について話し合いを持ちましたので、ご報告します。

まずポポフの活動は、1)地域主体の自然保護活動、2)環境教育、3)エコ・ツーリズム、4)調査研究、5)感染症対策、に分けられると思います。1)の地域主体の自然保護活動には、苗木センターによる植林、家畜育成による食生活の改善、アートセンターの民芸品製作が含まれます。2)の環境教育には、6つの環境学級によるカフジの自然を教材にした教育活動のほかに、図書館の建設、住民たちによるワークショップが含まれます。これらの活動はこれまでもポポフの主力を注いで実施してきたもので、ずいぶん大きな成果が上がっています。

戦争が終わって平和の兆しが見え始め、新しく推進したい活動は、3)、4)、5)の3つです。3)のエコツーリズムはそもそもポポフが生れたときの最初の目標で、戦争のためになかなか実現しなかったものです。会長のジョンさんはもともとゴリラ・ツアーのガイドで、現在もカフジ・ビエガ国立公園のガイドの養成に携わっています。幸いこの2月には日本のTBSが取材に来てゴリラの現状を日本に伝えてくれました。3月に羽仁カンタさんたちケータイゴリラの仲間がカフジを訪れてくれ、ポポフの活動を視察するとともに、ゴリラの観察を楽しんでくれました。こういった評判が伝わって、ゴリラを見に訪れる観光客が増えてほしいと思っています。とくに日本からの来訪を心からお待ちしております。

4)の調査研究は、バサボセさんや山極さんたちによってこれまで多くの業績があげられてきましたが、しばらく戦争のために不可能な状態でした。今後は再び国際的な関心を引き寄せ、地元の学生を巻き込んで調査研究と



◀モルモットの飼育

成果の普及に努めてほしいと思っています。環境学級のアンガで育った学生たちがもう高校を卒業するまでになりました。これらの学生たちをぜひカフジの自然を理解し保全する道へ導いていただきたいと思います。

5)の感染症対策は、新しく、しかも重要な課題です。戦争のために海外からの援助は途絶え、政府からの運営資金も来なくなって、多くの病院や診療所は閉鎖を余儀なくされました。マラリア、コレラ、赤痢などのこわい感染症に対する正しい知識も普及されないまま、多くの人々が病に冒されています。とくにエイズは急激に増加し、若者たちの将来に暗い影を落としています。この病気は、正しい知識と防止対策さえあれば、確実に防げるのです。ポポフはその普及を行い、感染の防止と治療の対策にこれから力を尽くしていこうと考えています。

このほかにも、1)の地域主体の自然保護活動として堆肥作りを積極的に推進しようと考えています。これまで放置されてきた家畜の排せつ物や野菜ごみは、不衛生な環境や病気の温床となります。これらのごみを集めて堆肥を作ることにより、生産力の高い土壌を育成しようと計画しています。すでに住民の協力を得て、堆肥作りを数カ所で行いました。また、緊急の際の出費対策として、収入の一部を貯金する運動を始めています。これは主として主婦たちが対象です。市場で生産物を買った収入をすぐに使ってしまうのではなく、貯金してそれを急病や学資など緊急の際の手当てに使うように呼びかけています。そのための預金通帳も作りました。預金はポポフが管理し、将来共同の事業にも使えるように計画しているところです。

これからもポポフは新しい事業をどんどん展開していくつもりです。どうか日本のみなさんも期待してください。



8月5日～7日 ●ポポフカフェ（新作ポポフうちわ展示会）

うちわでしのごうポポフと暑い夏（7日はバーと映画上映） 堺町画郎（京都市）

11月12日～13日 ●第14回サガシンポジウム

ポポフの紹介とグッズ販売を予定しています。 熊本市動植物園（熊本市）

## 環境学級アンガ訪問

山極寿一

今年の3月に、私はポポフの事務所と環境学級を訪れ、支援金と図書、環境教育に用いる教材を渡してきました。ちょうどルワンダで、2009年の国際ゴリラ年にちなんだゴリラの保護計画に関するワークショップが開かれており、GRASP(大型類人猿生存計画)の代表でイギリス人のイアン・レッドモンドさんが来ていたので、いっしょにポポフを訪れました。イアンさんは1980年に私がマウンテンゴリラの調査を始めた時からの旧友です。ヴィルンガ火山群で故ダイアン・フォッシー博士の指導を受けてマウンテンゴリラの保護と研究に長年たずさわり、現在も類人猿とその自然生息地の保護のために世界を駆け回っています。ジョンさんとも古い知り合いで、ポポフのよき助言者となっています。

私たちはカフジでなつかしいゴリラたちの顔を見た後、まずアンガ環境学級を訪れました。ここでは中学校(日本でいえば中学校と高校を合わせたような学校)の生徒たちが授業を受けていて、大歓迎してくれました。学校の周りには農場があり、ここで生徒たちは農業の指導も受けています。苗木センターもあって、イアンと私は生徒たちと一緒に記念植樹をしました。生徒たちに話をしてくれと頼まれ、私が小さいころの日本と状況が似ていることを話しました。野生動物たちは人間の活動によってすぐに追い詰められていなくなってしまう。それはこれから無限の可能性をもつ自然の財産を失うことだと私の考えを述べました。生徒たちは将来森林の管理や野生動物の保護の仕事をしたいという夢を語り、私たちはとても楽しいひと時を過ごしました。

アンガから500メートルぐらい下ったところには、ポポフの小学校があります。ここでは子どもたちが大きな声で迎えてくれました。4つの教室は子どもたちであふれ、先生の質問にわれ先に手をあげて答えています。久しぶりに子どもたちのパワーを感じました。私は、日本から持ち寄った絵本と文房具を校長先生に送りました。絵本は、日本でボランティアの



絵本と教材の贈呈 ▲

方々によってスワヒリ語に訳されています。絵本の言葉の部分にスワヒリ語のシールが貼ってあり、現地のだれもが読めるようになっています。ポポフのアーティストであるダビッドが描いた絵本もあるし、伏原納知子さんによって制作された「ジンガくん市場へいく」という絵本もあります。これはポポフの本部がある地元をモデルにしている、この近くにあるムダカという市場が実際に絵本に登場します。子どもたちは身の回りで起こっている出来事を絵の中に発見して、うれしそうにはしゃいでいました。

ポポフでは図書館の建設という目標があります。誰でもやって来れて、本が読める図書館があれば、みんなが気軽に勉強でき、いろんな話ができるに違いありません。これから少しずつ本を収集し、図書館のできる環境を整えていこうと思っています。そして、いずれはポポフのメンバーの手でたくさんの本を作って、この地域の昔話や人々の暮らし、自然の様子を世界の子どもたちに紹介できればいいな、と思います。

絵本を見る子どもたち ▼





## ゴリラたちの近況

山極寿一

先回のポポフニュースで報告したように、ムファンゼーラ集団とビリンドゥワ集団はリーダーのシルバーバックが死亡しました。メスと子どもだけの集団はばらばらになってしまうのではないかと恐れているのですが、その後これらの集団の詳しい情報がつかめません。公園のスタッフがモニターするにはずいぶん遠いところへ行ってしまい、しかも彼らが好むビエガ山のふもとはまだ反政府勢力がいて、極めて危険な地域なのです。時折出くわすベッドの様子から見ると、まだ新しいシルバーバックが加入してきて定着しているようには見えません。ただ、ベッドの数は毎回変わっていて、メスたちが少し分散し始めているようにも思えます。リーダーがいないと人間を怖れてあまり姿を現さないので、直接観察して確認するのが難しいのです。表には2集団のメンバーの最大値を示しました。

昨年の7月14日に、観光客が訪れるチルンデ湿地のそばでシルバーバックの死体がレンジャーたちによって発見されました。死後5日ほど経っていましたが、おそらく150キロ以上ある成熟したシルバーバックだろうと推測されています。死体の近くには3頭のメスがいて、そのうち1頭は赤ん坊を抱えていたようです。メスたちはなかなかこの死体のそばを離れず、不安そうに森をさまよっていたということです。ここはチマヌーカ集団の行動域で、ゴリラたちの大好きなミリアントゥスという大きな果実がたくさん実ります。おそらくこのゴリラたちはミリアントゥスを求めてここへやってきて、チマヌーカ集団と出会い、オスどうしの激しい闘いになったのではないのでしょうか。チマヌーカ集団には傷ついたゴリラはなく、チマヌーカにも変わった様子はありませんでした。死体が腐乱してしまっているので傷を確かめることはできませんでしたが、病理解剖の結果、オスの死因は病気ではないようです。私は昔マエシェと呼ばれるシルバーバックが他の集団と闘い、胸に大きな咬み傷を受けて1週間ほどほとんど動けなかったのを記憶しています。このオスがチマヌーカと闘って死んだ可能性は高いと思います。死因が病気ではないことが救いですが、ムファンゼーラやビリンドゥワ、そしてこのオスが立て続けに亡くなったことはカフジのゴリラたちの将来にとって不安な材料です。

ただ、チマヌーカ集団だけは順調に赤ん坊



◀ 甘ん坊のゴリラの赤ちゃん

が生れて増え続けています。昨年も双子の赤ちゃんが生まれました。何と2003年にこの集団で最初に赤ん坊が生れて以来、4組の双子が生まれています。チマヌーカというシルバーバックは双子を産む遺伝子を持っているのかもしれませんが。チマヌーカの周りにはいつも子どもゴリラたちが群がっていて、彼はとても幸福そうです。ゴリラの社会では、子どもたちが乳離れをするようになると、お母さんゴリラたちが子どもをシルバーバックに預けます。子どもたちをおとなに育て上げるのは母親ではなく、父親の役割なのです。チマヌーカも将来を担うゴリラたちをたくさん育ててほしいものですね。

また、ガニヤムルメ集団にも赤ん坊が生れて、この集団も少しずつ増え始めました。子どもが増えることはオスがメスたちに信頼されている証です。現在、カフジ・ビエガ国立公園の山地部に生息しているゴリラは160頭余り。そのうち動向が把握できているゴリラは120頭近くにのぼります。早く平和が訪れて観光客がたくさん来るようになり、いろいろなゴリラの集団を紹介できればと思います。そのときが来るまでゴリラたちが健康でいてくれるように願っています。

子だくさんのチマヌーカ ▼



カフジ・ビエガ国立公園でモニター  
されているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバー バック	ブラック バック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13 歳以上	8-12 歳	8 歳以上	6-8 歳	3-6 歳	0-3 歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17		3	13	34
ビリンドウワ			3		3	1	7
ムファンザーラ			8	4	1	5	18
ランガ	1		5		1		7
ムプングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		2	3	14
マンコト	1		12	1		2	16
無名	1	1	10			3	15
合計	7	1	69	5	10	27	119

## 会計報告

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	1,772,307	ニュースレター印刷費	46,000
講演会・シンポジウム カンパ	119,154	封筒印刷費	9,800
展覧会売上	50,000	ニュースレター・ホームページ作成費	10,000
作品売上寄付	36,600	ポポフグッズ材料費	542,038
ポポフグッズ売上（現金）	669,640	カレンダー製作費	52,800
寄付（現金）	207,022	郵送費	58,550
売上・寄付（郵便振替）	1,265,403	ポポフへ送金	2,704,300
受取利子	229	John Kahekwa 招へい費	817,850
		次年度へ繰越金	39,017
計	4,280,355	計	4,280,355

ろうきん東海NPO団体等寄付システム、上野動物園ゴリラ基金、日本グレイトエイプス保護基金 GRASP - JAPAN、A SEED JAPAN「ケータイゴリラ」から、寄付金をいただいています。

## 近刊案内

- 山極寿一著『ヒトの心と社会の由来を探る—霊長類学から見る共感と道徳の進化』高等研選書②
- 京都水族館（仮称）と梅小路公園の未来を考える会編  
『京都に海の水族館？ 市民不在のまちづくり計画』かもがわブックレット
- 日高敏隆著『ぼくの世界博物誌—人間の文化・動物たちの文化』玉川大学出版部
- 小長谷有紀・山極寿一編『日高敏隆の口説き文句』岩波書店
- 小田亮著『利他学』新潮選書
- 総合人間学会編『人間にとっての都市と農村』学文社
- 根ヶ山光一・柏木恵子編著  
『ヒトの子育ての進化と文化—アロマザリングの役割を考える』有斐閣
- 藤田和生『比較行動学—ヒト観の再構築』放送大学教育振興会
- 床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』京都大学学術出版会
- 小長谷有紀編『梅棹忠夫のことば』河出書房新社
- 松沢哲郎著『想像するちから—チンパンジーが教えてくれた人間の心』岩波書店
- 斎藤成也著『ダーウィン入門—現代進化学への展望』ちくま新書
- 寺島秀明著『平等論—霊長類と人における社会と平等性の進化』ナカニシヤ出版
- 菅原和孝著『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』講談社
- 高田公理著『語り合うにつぼんの知恵』創元社
- 中地フキコ『ルワンダに教育の種を—内戦を生きぬいた女性・マリールイズの物語』かもがわ出版
- 若生謙二著『動物園革命』岩波書店
- 秋道智彌『コモンズの地球史—グローバル化時代の共有論に向けて』岩波書店



# ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に 口座番号：00810-1-90217、加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新製品です。

- ☆ポポフ絵はがきセット(10枚組) 1000円
- ☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット(5枚組) 600円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・ペンダント 2200円
- ☆ヒガシローランドゴリラ・キーホルダー 2200円
- ☆どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り) 3000円
- ★新ケイタイ・ストラップ(白と黒) 1500円
- ★ポポフエコバック 1500円
- ★ポポフ2012年カレンダー(予約販売11月頃配布) 1000円

2012年  
ポポフカレンダーを作ります。  
200部限定  
見開きA4サイズ  
1部1000円(送料込み)  
発売開始 11月

ゴリラの写真や絵がいっぱい!!  
予約を受け付けます。  
ポポフグッズと同様、  
郵便振替でお申込下さい。



◀東ロランド  
ゴリラ・ペンダント・キーホルダー



◀どこでもゴリラ・  
ブローチ(木彫り)



▲ポポフ絵はがきセット

▶ケイタイ・  
ストラップ(黒)



NEW!!

▶ケイタイ・  
ストラップ(白)



NEW!!



▲ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット

## 絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のCD販売について



ダビッド・ビシムワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』(福音館書店)は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの?」と困る方がたくさんいらっしゃるようになりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声をCDに録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を声とバックミュージックだけのカラオケ調の2種類で録音してあります。このCDを作成費と郵送費、それにポポフへのカンパ代500円を含め1000円で販売します。ご希望の方はポポフ・グッズと同じ要領でご注文ください。折り返しCDを郵送させていただきます。

## ソングソング

語り手：ジョン・カヘークワ（昨年9月世界の霊長類絵本展の会場でジョンさんが語ってくれたお話です）

あるところに1人の農夫がいました。農夫は畑でトウモロコシを育てていました。トウモロコシが実をつけはじめると、一匹の虫ソングソングが農夫に言いました。

「私は背骨のない小さいな虫です。追いつかないで、どうかこのトウモロコシの中にいさせてください。この中でしか生きられないのです」

「あそうかい。ではトウモロコシの中にいてもいいよ」

と農夫はいいました。けれどソングソングはトウモロコシの中にじっとしているだけではありませんでした。ソングソングはトウモロコシを食べはじめました。食べて食べて、毎日食べていると、トウモロコシは元気がなくなって来ました。

「おや、どうしたことだ。トウモロコシが弱っていて病気のようなだ」畑にやって来た農夫は元気がないトウモロコシをじっと見ていました。すると中からソングソングが顔をだしました。

「おいソングソング。お前は中にいるのか」農夫が聞きました。

「はいいますとも」ソングソングは答えました。

「中で何をしているんだ」

「私が中で生きていくにはご飯もたべないといけません」

「そんなに食べたら、私のトウモロコシが病気になるじゃないか」

「いえいえ、ほんの少ししか食べていませんよ」

そう言ってソングソングはまたトウモロコシの中で食べ続けていました。

そうして、トウモロコシの収穫をする時が来ました。

「ソングソング」

「はいはい」

「もう外へ出る準備ができたか？」

農夫が聞きますと

「いえ。もう少し待ってください。トウモロコシはまだ硬いですよ」

農夫はもう少し待つことにしました。そうして7日ぐらいたってからまた収穫に来ました。



「ソングソング、もう出る準備はできたかね」

「いえ、まだなんです。トウモロコシはもう収穫できるけれど、今日は刈らないでもう少し待ってくださいな」ソングソングは頼みました。農夫は仕方ないので次の日に収穫することにしました。

次の日、農夫がやって来て

「ソングソング。今から刈り取るので出てくれ」

と頼みました。するとソングソングは「どうぞ。刈り取ってください。私も一緒に連れて帰ってくださいな」

と頼みました。

「そうかい」

と農夫は、ソングソングが中に入ったまま、トウモロコシを刈り取って家へ

帰りました。

家に着くと、農夫はいいました。

「ソングソング。さあ出て来い」

するとソングソングは

「まだですよ。料理をする時になったらここからですよ」

と頼みました。そこで農夫は鍋に水をはり、トウモロコシを入れ、火にかけていました。

「ソングソング出てこい。鍋を火にかけたぞ」

するとソングソングは

「いやいや、まだ水が湯になっていませんよ。煮立ってきたら私は外にですよ」

と頼みました。

火にかけた鍋はぐらぐらと煮立ってきました。農夫はもう一度ソングソングに声をかけました。

「ソングソング。出てこないのかい」

しかし返事はありません。農夫はソングソングが入っているトウモロコシを鍋から取ると、半分に切ってみました。するとソングソングはトウモロコシの中で死んでいました。

訳・絵 ふしはらのじこ

## ポポフのホームページ

お願い：

ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

HYPERLINK

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシムワが製作した絵ハガキも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部